

# 平成30年度 嶺北特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習指導	学習指導要領内容表等を用いて、個々の実態を把握する。個々の教育的ニーズがより反映されるように「個別の教育支援計画」の書式等を見直し、合理的配慮の観点から踏まえて、それらの計画に基づいた教育実践を推進する。	「取組指標」(A、B)の合計は100%、「成果指標」(A、B)の合計は95%となり、どちらも目標指数は達成された。Cと回答した割合は、「取組指標」では0%、「成果指標」では5%と、昨年度より減少した。また、Aと回答した割合は、「取組指標」では25%、「成果指標」では15%と、昨年度に比べてわずかではあるが増加している。合理的配慮を踏まえて「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を作成し、その目標達成に向けて取り組んでいることが伺える。 保護者の「満足度指標」におけるE「変わっていない」と回答した保護者は、小学部低学年は0名、小学部高学年は1名、中学部は3名、高等部は6名で、総数では昨年度より微増し、割合は3%となったが、「目標指数」15%以下は達成された。また、保護者が我が子の成長を感じているのは、昨年同様、「社会生活面」が最も多く32%、続いて、「日常生活面」「学習面」「身体面」の順であった。	どの指標においても、目標指数は達成されているが、これを継続するためには、以下の4点が大切と考える。 ①児童生徒の実態を客観的に捉えるために、学習指導内容表(もしくは発達段階に応じた指導内容表)、自立活動内容表(チェック表)などのより有効的な活用を促す。 ②合理的配慮を踏まえた「個別の支援計画」の作成により、継続性のある学部単位の長期目標と、それを実現するための毎年の短期目標を設定し、それらを念頭に置いた授業実践を促す。 ③保護者との懇談において、「個別の支援計画」や「個別の指導計画」を用いて、児童生徒の様子を的確に伝え、十分に共通理解を図る。 ④教員同士の十分な話し合いと教材作り等の授業準備の時間を確保する。
2 児童生徒 指導	体育大会及び文化祭において、児童生徒の理解に努め、個々の活動意欲を育てるとともに、内容の創意工夫をする。	各学校行事において、ゆとりを持たせ、安全で楽しいものとするように企画運営した成果として、教職員からは99%以上、保護者からは98%、「十分にできた」、あるいは「おおむねできた」という評価を得ることができ、目標指数を達成することができた。そのうち、70%の保護者が、「十分にしていた」という評価であった。しかし、「あまりできなかった」「あまりしていなかった」と評価した教員・保護者も数名いたので、さらに個々の児童生徒のニーズに合わせた、積極的に参加できる活動を企画運営していく必要がある。	体育大会は、例年通り、小中学部と高等部は別日に開催した。また、今年度はいずれの体育大会も雨天のため、体育館での開催となったが、大きな混乱もなく、それぞれの学部の児童生徒が、自分の役割を意識して活動できた。来年度も、保護者からのアンケートを参考に、今回の反省点を踏まえさらに充実した体育大会になるようにしていきたい。また、児童生徒がのびのびと活動できるように、全校集会等を利用して、さらに活動意欲を高めていきたい。 文化祭では、高等部の生徒による準備や後始末も定着し、自主運営によってより充実感を味わうことができています。ステージ発表や、校舎全体を使った様々な企画がなされ、学校中が大いに賑わいを見せた。高等部の製作品や野菜の販売も盛況であった。今後もこれらのことを継続し、児童生徒がより意欲を持って活動できるようにしていきたい。
3 保健指導 ・食育	健康や食に関する情報や教材などを提供し、個々のニーズに応じた保健指導や給食指導を推進する。	「取組指標」95%、「成果指標」89%という結果で、目標を達成することができた。特に、児童生徒に対しての「取組指標」は、昨年を上回る結果が得られた。これは、毎月の保健・給食努力目標に応じた教材の紹介や掲示物、熱中症や感染症等の予防や対策に関する情報の提供などによる成果であると考えられる。しかし、児童生徒個々の状況に応じた適切な教材の提供や、継続した指導については、今後の課題であると考えられる。 保護者の評価については、目標を大きく上回ることができた。	保健・給食努力目標を意識した取組は今後も継続し、教材を作成したり、それぞれの学級や学部で実施した指導についてまとめたりして、教材の蓄積や整理を行うとともに、取組状況の確認や、どのような資料や情報が必要かなどについて、アンケート調査などを行いながら進めていきたい。また、歯磨きや手洗い、うがいなどの基本的な生活習慣の指導、性に関する指導などについては、養護教諭が担任と協力しながら保健指導の機会を増やし、個に応じた指導を行うようにしたり、栄養教諭から食に関する情報を発信したりして、健康な体や食について意識できるようにしていきたい。
4 研究・研修	児童生徒のアセスメントを基に、適切な最近接の課題を設定し、指導を行う。	「取組指標」の「有意義な研究になるように、研究活動に協力することができたか」に対して、A+Bで100%(昨年度94%)、「成果指標」の「適切な最近接の課題を設定し、指導を行うことができたか」に対しても、同様に100%(昨年度96%)となり、それぞれ目標の80%を上回った。さらに回答を「十分にできた」「おおむねできた」に絞ると、それぞれ87%、82%(昨年度69%、73%)となり、校内研究のテーマに基づく研究の2年目として、理解が進み、実践に結び付きつつあることが伺える。昨年度は高等部について、「取組指標」「成果指標」ともに「できなかった」と回答した教員が数名いたが、今年度は「できなかった」と回答した教員はいなく、全員が参加した研究会になった。 保護者評価による「満足度指標」については、98%(昨年度96%)の保護者が、「子どもの実態やニーズに合った授業に取り組んでいる」と回答しており、目標の90%を上回った。	今年度は、全教員が研究に関わることができ、研究の体制が整った。また、研究会では意見交換が進み、より良い指導につながる知見を多く得ることができた。来年度もこの体制を続けて行いたい。また、児童生徒のアセスメントを基に適切な最近接の課題を設定し、どのような支援が適切であるかを日々の実践の中で確かめていきたい。さらに、保護者へも、指導を通してどのような支援が良いかについて共通理解を深めることに努めたい。
5 家庭連携	日頃から保護者との連携を密にし、保護者懇談会や各種行事への参加を働き掛けて、さらに意思疎通を図る。	教職員対象である「保護者への働き掛け(PTA行事や各事業、会議への参加を働き掛ける)」という項目は、今年度から目標指数を70%に設定したが、それを上回る80%となった。 具体的な行事について見てみると、「親子レクリエーション」は3年連続で校外での活動であったが、昨年並みの参加者があり、好評価を得た。この行事は、昨年度は、夏冬の2回実施したが、冬季は天候に左右され風邪などによる欠席者も無視できないため、例年通りの夏1回の実施に戻した。しかし、「近場で、少ない負担で参加したい」「子どもの興味・関心を第一にしたい」という保護者のニーズには対応できたと考える。また、「嶺北親の会」との合同企画で実施された「くらしを考える会」も、保護者のニーズに沿ったテーマにしたことで好評であった。「おやじの会」も「嶺北親の会」との合同企画となって3年目であるが、貴重な情報交換の場となっていることは勿論、新しく参加された保護者にとっても親睦を深める場になっており、今後も期待できる行事と考える。 一方、各種会議への保護者の参加数であるが、平成24年度に改定された会則(「3年に1回以上は役員または委員を担当する」)に沿って交代で役員をお願いしているが、役員になっても参加されない保護者は依然として多く、今後の課題である。 「協力関係や理解を深めることができた」という項目については、今年度も教職員と保護者では感じ方にズレが生じており、そのズレは昨年度より大きくなった(保護者76→77%、教職員95→99%)。また、この意識のズレは、学部が進むにつれて大きくなることから、保護者のニーズも学部が進むにつれて多様化していること、そして高等部から入学する生徒の保護者の願いに、教職員が十分に答えられていない結果とも考えられる。	「親子レクリエーション」は、複数年ごとに校内と校外で交互に実施しているが、リフレッシュ工事が数年続いたため、しばらくは校外での活動を考えている。よって、今後も保護者のニーズに耳を傾け、多くの人が参加しやすい行事を企画していきたい。また、その他の行事や事業についても、研修委員会や行事委員会で保護者から出された意見をできるだけ具体化し、実現できるようにしたい。 一方、各種会議における保護者の参加数を増加させる取組として、今年度は、まず広報委員の方をお願いし、定期に開催される評議員会にできるだけ参加してもらえよう、広報委員会の回数を減らしたり開催日を工夫したりした。その結果、広報委員の方の出席率は増加に転じた。また、学校が運営する各種委員会についても、全学級委員を対象にしたアンケート調査を行い、年間を通して都合の良い曜日を把握することで、多くの保護者に参加してもらえ、多様な意見が出され、委員会が活性化したと考えられる。今後も、「分かりやすいPTA活動、参加しやすいPTA活動」となるように声掛けや取組にも工夫していきたい。また、学級担任とも協力しながら、日頃から働き掛けを工夫する必要がある。加えて2020年度に県知P連事務局長が本校となるため、それを見据えた体制作りについても、今後検討し、整えていかなければならない。 保護者との協力関係における意識のズレを解消するためには、PTA活動の必要性を多くの保護者に感じてもらうとともに、保護者との信頼関係を深める工夫も具体的に考えていかなければならない。また、保護者への効果的な働き掛けを渉外部でも研究・提案することで、両者のズレを少しでも小さくしていきたい。

		<p>授業参観の1・2学期の参観率は全体で62%で、過去最高の参観率となった平成27年度と同じ水準の参加率となり、目標指数は達成した。参観率を学期毎に見ると、1学期は61%、2学期は62%であり、学期毎に見ても、目標指数を達成している。</p> <p>各学部学年毎に見てみると、小学部低学年は84%、小学部高学年は72%、中学部は73%、高等部48%であり、他学部と比較すると、高等部は例年低い数字となっている。1学期、2学期を比較してみると、小中学部は2学期の方が低くなっているのに対し、高等部は2学期の方が高くなっている。これは、2学期に「進路セミナー」を同日開催したことによるものと考えられる。</p>	<p>年度始めに、年間学校行事予定を保護者に知らせ、予定を組み入れやすくする。また、2学期の「進路セミナー」のように、保護者の関心が高い内容の学習会等を同日開催するなどして、他校務部とも連携していきたい。</p> <p>授業参観は、児童生徒の学校での活動や成長の様子を見る良い機会として、今後も学期末に実施していきたい。また、子どもが所属している学部だけでなく、他学部の児童生徒の実態や授業状況を知ってもらう機会としても重要であることを、お知らせなどで周知していきたい。</p>
6 進路指導	<p>児童生徒一人一人が自ら進路選択ができるように、授業や行事などにおける進路学習の充実を図る。</p>	<p>「取組指標」「成果指標」の結果は共に高く、「大いに工夫した」「大いに高めることができた」と回答した教職員が、昨年度よりも倍近く増えた。</p> <p>それに対し、「満足度指標」は、全体的には昨年度同様であった。関心・意欲が「あまり高まらなかった」と回答した保護者の割合は、小学部低学年から中学部にあがるにつれて減り、高等部になると、やや増える傾向にある(小学部28%、中学部9%、高等部12%)。しかし、「まったく高まらなかった」と回答した保護者は一昨年2名、昨年1名いたが、今年度は0人であった。また、高等部保護者だけを見ると、「大いに高まった」の回答が36%から43%に増加するという成果が見られた。</p> <p>小学部では、進路選択はまだ先ということから、「取組指標」の高さに伴った成果は見えにくいことが考えられる。高等部では他校からの入学生が全体の半数ほど占めており、将来の生活に目を向けるのは、まだこれからであるという印象を受ける。</p> <p>今後も、保護者の関心・意欲が高まるように取り組んでいかなければならない。</p>	<p>保護者に早くから進路についての情報を得ってもらうため、今後も進路説明会、企業施設見学会、各セミナーなどについて早めに周知して、参加を促すようにする。</p> <p>教職員に対しても同様に、参加を呼び掛け、啓発を進めていく。</p> <p>また、特に高等部では、保護者の関心・意欲が高まるように、以下の点を充実させたい。</p> <p>①現場実習の成果や課題について、教職員間で情報を共有し、個々の生徒の目標を明確にし、その後の進路学習や職業指導に役立てるように工夫する。</p> <p>②進路相談では、地域の進路先について生徒・保護者に正しい情報を提供し、個々の生徒の課題と目標を踏まえた進路支援ができるように努める。</p>
7 特別支援教育	<p>参加者のニーズに応じた学校公開を開催する。</p>	<p>「取組指標」「成果指標」「満足度指標」すべてにおいて目標指数を達成することができた。</p> <p>学校公開後のアンケートにおいても、おおむね高評価を得ることができた。学校公開は、特別支援学校を進学先に考えている保護者を主な対象とし、小中学部の公開を2日間、高等部の公開を2日間、計4日間行った。高等部の公開については、地域の中学校の生徒についても参加を可能とした。今年度は、生徒だけのグループを作って見学や質疑応答を行った。質疑応答について、生徒グループは保護者と別室で行い、本校高等部教員が回答するようにした。これらのことより、対象の方が必要としている情報を提供することができ、満足度の高い学校公開になったのではないかと考える。しかし、保護者グループを2グループ、生徒グループを1グループ、計3グループにしたため、見学場所が重なることがあった。</p>	<p>保護者グループは、説明が聞きやすいように10人程度のグループに分かれて見学を行うようにする。高等部の公開においては、進路を考えるために中学1年生から参加する生徒もいるため、生徒グループを作り、本校教職員が生徒のペースに合わせて説明し、質疑応答していく。また、見学場所が重ならないように見学内容や見学順番を工夫し、よりニーズに応じた学校公開にしていきたい。</p>
8 情報の管理	<p>定期的に情報セキュリティ・モラルや校務の効率化に関する研修会を企画したり、随時情報を提供したりする。</p>	<p>「取組指標」「成果指標」共に目標を達成した。</p> <p>「取組指標」については、98%の教員が年1回以上研修会に参加しているとの回答があり、目標の70%を大きく上回った。毎年継続して研修会を行う中で、研修を受ける必要性を感じてもらえたのではないかと考える。</p> <p>「成果指標」については、Dの割合が20%以下という目標に対して0%という結果となり、教員の情報の取り扱いに対する意識の高さが伺えた。</p>	<p>情報の取り扱いに対する知識や技能の向上について目標を設定したが、こちらが想定する以上の達成率になった。さらに、情報モラルを高め、校務が効率化し便利になったと感じてもらえるような取組をしていきたいと考えている。</p>
9 寄宿舎生活	<p>「個別の支援計画」に基づいて、寄宿舎生の自立を目指し、社会に適應する力を高めるように支援を行う。</p>	<p>寄宿舎指導員が回答した「取組指標」では、A+Bの合計が100%となり、保護者のニーズを踏まえた「個別の支援計画」を立案して、実践することができたと考えられる。また、寄宿舎指導員から見た子どもの成長(「成果指標」)では、93%が成長したと実感している。「個別の支援計画」に基づいて指導ポイントを明確にし、日々の実践を行うことで子どもの成長に結び付けることができたかと判断することができる。</p> <p>保護者が回答した「満足度指標」では94%が成長したと判断していることから、保護者にとっても「個別の支援計画」に基づいた観点で、我が子の変化をとらえていると考えられる。一方で、4人の保護者が、「期待したほどは成長しなかった」、あるいは「まったく成長しなかった」と感じていることを考えると、ケースによっては「個別の支援計画」に掲げた目標や支援方法を見直すことも必要である。</p>	<p>「子どもが期待したほどは成長しなかった」(5%:中2人、高1人)、「まったく成長しなかった」(2%:高1人)と回答した保護者がいる。中学生や高等部生の身辺処理能力やQOL向上など、子どもの生活全般を細かく観察し、保護者のニーズを設定する段階から十分に意見交換を図っていきたい。また、懇談会だけでなく、帰省時などの機会を捉えて、日頃の様子を報告するなど、丁寧に対応していきたい。</p>